

こうしんとう 庚申塔とは その2

前稿（その1）で、庚申塔の造立された背景について概観しました。次に本稿では、庚申塔は他の石塔・石造仏とはどこが異なるのか、その見分け方を見ていきます。ただし、庚申塔も時期や地域によってさまざまな形態が派生しているため、あくまでも基本的な例としてご参照ください。

まず、南関東地域で最も一般的な庚申塔の本尊が、青面金剛です。青面金剛は病魔退散の仏とされますが、元々庚申信仰とは関係なく、初期の庚申塔には他の仏像を彫った例も多く見られました。大田区でも最古の塔（1661年造立）には地藏菩薩像【次頁写真①】、次いで古い塔（1662年造立）には阿弥陀如来像【次頁写真②】が彫られており、青面金剛像が登場する最古の塔【次頁写真③】は1672年の造立です。その後、庚申信仰の流行とともに庚申塔造立の最盛期となった18世紀前半には、青面金剛の姿や文字を彫った塔が大半を占めるようになっていきました。

青面金剛の主な見た目は、怒った顔で牙を生やし、多くの腕（一般的には6本）にさまざまな武器や法具などを持ったり、中央の腕が合掌している姿【次頁写真④】で表されます。また、石製ではわかりませんが絵画や木造仏などでは名前のおり青い肌をしています【次頁写真⑤】。似た像容を持つ石造仏として馬頭観音（観世音）の塔【次頁写真⑥】がありますが、こちらは一般的に顔が3つで正面の頭上に馬の顔を頂く姿で表されます。馬頭観音塔は、馬の供養や健康祈願が転じて通行人の交通安全や道案内のために建てられたもので、庚申塔に馬頭観音が彫られることはなく青面金剛とは明確に区別されています。ただし、混同して馬頭観音塔を祀っている庚申堂が区内の上池台地区にあります。

次に、同じく庚申塔の大きな特徴となっているのが、いわゆる「見ざる、聞かざる、言わざる」を表した三猿の意匠です。こちらも庚申信仰とは本来関係がありませんでしたが、青面金剛と同時期に登場し、以降の塔には必ずと言ってよいほど彫られています。その理由としては、「庚申の“申”が干支で“さる”のため」、「三猿の態度（悪いことを見ない、聞かない、言わない）を自身に投影し、天帝へ身の潔白を示している」、「猿を“（悪が）去る”とかけ、悪疫退散の祈願をした」、「神（山王権現）の使いであった猿が庚申信仰と習合した」などが挙げられ、語呂合わせや御利益の身近さから、庶民的信仰心との相性が良かったと考えられます。前稿（その1）で紹介した「帝釈天を祀った庚申塔」を見てみると、実は「青面金剛像」も「“庚申”の文字」も彫られていないため、一見すると別の供養塔に思えてしまいます。しかし、造立者は「三猿さえ彫ってあれば庚申塔と判別できる」という自信を持って、この意匠にしたことなのでしょう。それほど三猿は象徴的な存在だったのです。

そのほかに見られる庚申塔の特徴としては、一羽もしくは二羽の鶏を表したものがあります。鶏は青面金剛が庚申塔へ採用されるのに付随して登場したのと考えられますが、干支で“さる”の次が“とり”であることや、「朝告げ鳥」とも呼ばれ夜明けを知らせることから、庚申の日を終わらせる役割を持つこととなりました。実際に、区内馬込地区に残る庚申塔には「鶏が鳴く時を庚申待の終わりとする」という記載が見られるものもあります。早く夜明けが来ることを願っていたのでしょう。



写真①
地蔵菩薩像が彫られた塔
田園調布南24-18 密蔵院
大田区指定文化財



写真②
阿弥陀如来像が彫られた塔
大森北3-5-4 密蔵院
大田区指定文化財



写真③
青面金剛像最古の塔
矢口3-21-15 円応寺
大田区指定文化財



写真④
合掌する青面金剛像の一例
多摩川1-5-14 遍照院
大田区指定文化財



写真⑤
木造青面金剛像の一例
田園調布南24-18 密蔵院
大田区指定文化財 **【非公開】**



写真⑥
馬頭観音塔の一例
南千束2-2-6 妙福寺
大田区指定文化財